# ニセコ
# 「日本と思えない」ところ

巖谷　國士 Iwaya　Kunio

1943年東京生まれ。東京大学出身。仏文学者・評論家・作家・写真家・明治学院大学名誉教授。シュルレアリスムの研究と実践を軸に、芸術・文化の広い領域にわたって執筆活動を展開。講演や展覧会監修、内外の紀行でも知られ、北海道との縁も深い。著書に『シュルレアリスムとは何か』ほか多数、近著に『澁澤龍彦論コレクション』全５巻。５月26日に小樽文学館で講演をした。

ニセコは後志（しりべし）総合振興局の中南部にあって、人口が5000人そこそこの小さな町だが、ここ数年来、メディアによくとりあげられてきたせいか、とみに名声が高まっている。自然の景観や温泉に加えて、最良の雪質にめぐまれたスキー・リゾート、外国から集まってくるトゥーリストや移住者たち、といった話題がつきもので、いまでは北海道でも指おりの観光地に数えられるほどだ。

最近、私は前回のテーマとしたなじみの都市・小樽へまた招ばれ、市立文学館で講演をしたのだが、その折に会った小樽や札幌の友人たちも、私が翌日ニセコを再訪するというと、たいてい似たような反応を示した。「外国人が多くて日本と思えない」とか「日本語の通じない店やホテルもある」とか。なかには「なんでまたあの観光地へ？」といって、怪訝（けげん）な顔をする人までいたのはおもしろかった。

いっそう興味をそそられてしまう。こんにち「日本と思えない」ことには積極的な意味があると思えるし、そもそも北海道全体がそういうところだろう。外国人と外国語が幅をきかせる町ということなら、世界中にいくらもある。観光にしても移住にしても、大昔からつづく人間の文化と生活のかたちなので、日本ではなぜか例外と見られがちなそういうニセコの現状を、この目で確かめてみたくなるのは当然である。

それにしても、どうしてニセコは国際的な観光地になったのか。風光や雪質だけで説明できることではないだろう。かつて狩太（かりぷと）（真狩別太（まっかりべつぷと）の略称）と呼ばれたこの土地には、明治期に開拓・移住がはじまってからの特異な歴史があり、とくに1922年、作家・有島武郎（1878―1923）の「解放宣言」によって成立した「狩太共生農団」の記憶をとどめている。集団による自治と共生を長く維持したその「有島農場」の精神もまた、現在のニセコに多少とも生きのびていて、内外からのトゥーリストや移住者を魅（ひ）きつけているのではないか、と思われもする。

私がその点に触れたくなるのは、今回、2001年に施行された「ニセコ町づくり基本条例」という文書を、あらかじめ読んでいたからである。これは全国ではじめて「自治」を正面から謳（うた）った条例とされるが、前文にはまずこう書かれている。

「ニセコ町は、先人の労苦の中で歴史を刻み、町を愛する多くの人々の英知に支えられて今日を迎えています。わたしたち町民は、この美しく厳しい自然と相互扶助の中で培われた風土や人の心を守り、育て、「住むことが誇りに思えるまち」をめざします。

まちづくりは、町民一人ひとりが自ら考え、行動す

ることによる「自治」が基本です。わたしたち町民は「情報共有」の実践により、この自治が実現できることを学びました。

わたしたち町民は、ここにニセコ町のまちづくりの理念を明らかにし、日々のくらしの中でよろこびを実感できるまちをつくるため、この条例を制定します。」

やわらかな語調で書かれているが、内容はよくある空疎な言葉の羅列ではなく、苛酷だった開拓の歴史を前提に、美しい自然と相互扶助を通じて誇りを育て、「自治」の基本を個々人の思考と行動に求めている。中央に媚びず経済に傾きもしないで、まさに自治の「基本」を確認する声明だといってよいだろう。

とくに注目したいのは「相互扶助」という、やや古くさくも見える言葉を、カギ括弧なしで用いている点である。じつはこの言葉、農場の解放と自治・共有化にあたって有島武郎の用いたキーワードであり、その思想の根幹を占めていた概念なのである。

その拠りどころがロシアの名高い生物学者にして無政府主義者・クロポトキン（1842―1921）の『相互扶助論』（1902年）にあり、有島武郎がこの先人に私淑したあげく会いにまで行っていたという事実も、知る人ぞ知るところだ。その言葉をさりげなく用いて「自治」を唱えた「基本条例」はしたたかでもある。おそらく表面にはあらわれていないにしても、外国人も移住してくるこの町の魅力には、この自治と共生の方針もまた関わっているのではなかろうか。

そのことはまたあとで述べるとして、今回、小樽からの日帰りでニセコへ行く私には、目的地を「有島記念館」とする以外になかった。駅の近くから東へ、45ヘクタールもの広大な土地にひろがっていた「有島農場」の跡地の中ほどに立つこの記念館を訪れれば、いま国際的な観光地・移住地となっているニセコの秘密の一端に出会えるかもしれない。

## 旧「狩太」の記憶

小樽始発の函館本線もいまはすべて鈍行になっていて函館行がなく、ニセコまで直行する便も少ない。２輌連結の電車に乗って約１時間半、終点の倶知安（くっちゃん）で降り、乗換までの時間に駅前へ出る途中、あちこちから羊蹄山を眺められた。丸みのある頂上から白い雪の縞模様を四方にひろげている姿は、初夏の青空のなかにぽっかり浮かぶ不思議なオブジェみたいだ。

駅の反対側にはニセコアンヌプリのとんがり頭が望まれ、こちらは緑の樹林の上に真っ白な斑模様をひろげている。雲が速い。空気は乾いている。

ニセコへ行くのは１輌だけのかわいい電車だった。それでも乗客はまばらで、両側の窓から景色がよく見える。森に野に畑、尻別川の清流。ときおり左に羊蹄山が、右にニセコアンヌプリがあらわれ、だんだんに近づいてくるようだ。

倶知安とニセコのあいだには比羅夫（ひらふ）という小さな無人駅があり、停る前に車内放送が流れて、「この駅にはバスもタクシーも来ないので、不用意に降りないように」と注意したのがおかしかった。それでも降りる人が二、三いたのは、たぶん近くに住んでいるか、釣やボートで遊ぶためかもしれない。

ニセコ駅は比較的新しく、アルプス風に木組を出したハーフティンバーで、とんがり頭（ニセコアンヌプリを象ったともいう）の塔がいかにも観光地だが、駅前にはうるさい看板も売店もほとんどなく、鉢植の草木にかこまれたカフェテラスがあるばかりで、あとはがらんとした空間。なにより陽ざしが強く、空気が澄んでいて気持がいい。２つの名山はいっそう近づいて見える。

タクシーで記念館にむかうあいだ、運転手氏といろいろ話をした。

「外国人が多いと聞いていたけれど、それほどでもないですね。」

「冬にはもっと来ますよ。住む人もいて、このところ町の人口がふえている。でも倶知安のほうが多いでしょう。あっちは人口増加率が全国一になったって。」

「ニセコ山系は倶知安側もあるから、単にニセコと

ニセコアンヌプリ。倶知安駅の陸橋から見た山景。　撮影：筆者

有島記念館（右）と羊蹄山。　撮影：筆者

いえば倶知安をふくんでしまうわけだ。ニセコ町＝ニセコじゃない。国定公園も「ニセコ積丹小樽海岸」だしね。そういえば、狩太町がニセコ町に改名したのも、国定公園になったのがきっかけですか。」

「昔のことだからわかりませんが。」

ニセコ山系が国定公園に入ったのは1963年、狩太町がニセコ町になったのはその翌年なので、もちろん無関係ではないだろう。66年にはニセコモイワ国際スキー場が開設され、国際化の端緒になった。さらに、長くなじまれていた狩太駅という呼称も、68年にニセコ駅と改名したのである。

「倶知安も小さな町だけど、後志総合振興局の所在地ですね。合併の話もあるとか。」

「小さくても人口はニセコの３倍以上だし、歴史も違う町だから、いっしょにはならないでしょう。」

先に引いた条例にある「自治」のことが思いおこされてくる。これには広い意味での共和国的な発想があって、地域の「中央」との結びつきを求める志向は薄いのかもしれない。

この知的な運転手氏と言葉をかわす間にも、窓外の光景に目を向けていた。なだらかな丘陵地に馬鈴薯などの畑がひろがり、ときおり見かける農家の建物はどことなく西洋風で、庭先にピンクと白の芝桜や、チューリップやペチュニアが咲いていたりする。かつて有島農場の「共生」を実現した人々の子孫も、まだかなり残っているという。

1922年に革新されたこの農場は大戦中も生きのび、25年の歳月を閲（けみ）した。ところが敗戦後、米軍による農地改革の際に解体されてしまう。土地の「私有」を否定する「共有」の理想は資本主義と真っ向から対立するものだし、いうまでもなく無政府主義と、また共産主義とも近いものに見られたからである。

こうして「狩太共生農団」は消滅し、広大な「旧有島農場」として、記憶のみをとどめることになったのである。

タクシーはやがてその中心部にある「有島記念館」の前に着いた。かつて農場事務所のあった場所に立つ新しい建物で、広い庭園のどこを歩いても眺めがよい。東南に羊蹄山、西北にニセコアンヌプリと連峰が見はるかされる。いや、見はるかされるというよりも、乾燥した透明な空気のせいで、間近にくっきりと浮かんで見える。

羊蹄山はその端正な山容を富士山になぞらえられもするが、標高は2000メートル弱で富士山の半分強しかなく、丸みのある単純な姿がむしろかわいい。そのうえ湿気が少ないせいか、富士山や他の日本の名山のように霞たなびくことがなく、どこまでも鮮明に、あっけらかんとしてそこにある。

「日本と思えない」のはむしろこの風景のことではないか、と感じられたものだった。

### *有島武郎と「相互扶助」*

記念館では若い主任学芸員が案内してくださった。外からは白い大胆な現代建築に見えるが、内部の展示室は重厚なレンガ壁で、写真を中心とした展示が興味ぶかい。他の作家の記念館とかわらず有島武郎の生涯を忠実にたどっているが、同時に狩太という土地の歴史もわかるようになっている。

いうまでもなく、有島武郎は北海道文学の偉大な先人というべき白樺派の作家だが、とくに代表作の『カインの末裔』（1917年）や最晩年の『親子』（1923年）などは狩太を舞台としている。後者に見るとおり、明治にこの地を開拓して農場化を進めた父の武（たけし）とは角逐（かくちく）があり、その父と妻が没してからは自身の理想を追求して1922年に農場の解放にいたったが、その翌年、関東大震災のおこる前に軽井沢の別荘で編集者と心中している。日本の近代社会の矛盾と葛藤を、ある意味で如実に体現した作家でもある。

東京育ちだが札幌農学校（現・北海道大学農学部）に学び、アメリカ留学とヨーロッパ周遊を終えて1907年に帰国したとき、農場経営の実態と小作人の悲惨な生活は、武郎にとって受けいれがたいものだった。信奉する前記クロポトキンの思想を受けつぎ、農民たちに贈った「農場解放記念碑文」には、つぎの有名な一節もふくまれている。

「誰れでも少し物を考える力のある人ならすぐ分ることだと思いますが、生産の大本となる自然界すなわち空気、水、土地の如きものは、人間全体で使うべきもので、あるいはその使用の結果が人間全体の役に立つよう仕向けられなければならないもので、一個人の利益ばかりのために、個人によって私有さるべきものではありません。それ故にこの農場も、諸君全体が共有し、この土地に責任を感じ、互いに助け合ってその生産を計るようにと願います。」（原文は旧字・旧仮名遣い）

100年以上も前に書かれた文章だが、いまも共感できるところがあるだろう。このあとに出てくるのが例の「相互扶助」という言葉である。じつはこの記念館の奥まった場所には、彼自身の揮毫（きごう）になる有名な書「相互扶助」の額が展示されているのだ。

「相互扶助」にはまず生物学上の意味がある。かつてダーウィンが進化論を発表して以来、それを通俗化した「適者生存」「弱肉強食」などの「生存競争」説が一世を風靡（ふうび）した。人間社会もその原理にしたがうとすれば、労働者搾取も植民地支配も帝国主義戦争も正当化され、階級・階層間の格差もいっそう強化されてゆくことになる。

クロポトキンは生物学者としてそれに異を唱えた。生物は「適者生存」するものだとしても、同時にまた「相互扶助」する存在でもあり、むしろそのほうが重要だという学説である。仲間を助けたり死を悼んだり、共同でくらしたりする動物がいることは周知だろう。端的にいえば、その学説にもとづいて「弱肉強食」の因となる「私有」を廃止し、「共生」をはかろうとする思想が『相互扶助論』の骨子だった。

有島武郎の「相互扶助」の前提にはその思想がある。意識的かどうかはともかく、それがほかならぬ現ニセコ町の「基本条例」にも反映しているとして、いまも支持できる部分がありそうだ。制度そのものとは別に、いままた私たちは、「弱肉強食」の「格差社会」に直面しているからである。

記念館は居心地のよい建物で、あちこちに大きなガラス窓があり、羊蹄山かニセコアンヌプリかを望むことができる。青空と白雲、池の水面と白樺並木。そういう単純な道具立ての構成するガラス窓のなかの風景は、やはり「日本と思えない」――だがいずことも知れない――小世界に見えたものである。

帰りは同じタクシーを呼んで、南の方角にある道の駅「ニセコビュープラザ」へ行ってもらった。運転手氏によると、ここの直売所はユニークらしい。60ほどのブースがあり、周辺の農家がそれぞれ個別に割りあてを得て、自身の栽培したものだけを持ちこんで売る。ほかから買った物品や自生している山菜などはだめだ。売上の12パーセントを組合に収めることになっているという。

なかに入ると３段にわかれた木の棚がずらりと並び、米や豆や芋、野菜や草花の苗、めずらしい食材や香料などを展示即売している。チャイブやルバーブやアップルミントもある。好物のアスパラガスを探したがもう売りきれていたので、東京ではめったに見ない丸々とした黒ニンニクを求めた。

外に出ると羊蹄山がいよいよ近くに見える。広い前庭に木のベンチとテーブルがあり、老若男女、というか多くは中年以上の男女が休んでいる。ここに外国人がいてもごく自然だろう。というか、みんなが外国人に見えた。さらにいえば、だれもが地球の住民だという気がしていた。

記念館にある有島武郎の書。「相互扶助」は生物学者・無政府主義者クロポトキンの『相互扶助論』にもとづく言葉である。
撮影：筆者